書　　評

W・ブラス(編)『人口学の生物学的側面』

W. Brass (ed.) *Biological Aspects of Demography,*
Taylor & Francis Ltd., London, 1971, vii+167pp.

本書は英国の人間生物学会シンポジウム第10巻 (Symposia of the Society for the Study of Human Biology, Volume X) として刊行されたものである．この人間生物学会は人間集団の生物学的研究を目的として1958年に設立され，毎年シンポジウムを開催している．本書は主としてそのようなシンポジウムで発表された報告の若干を集めたもので，全部で8篇が収められている．そのうちの6篇は，1967年11月に開催された「人口学の生物学的側面」と題するシンポジウムの諸報告にもとづくもので，他の1篇は1968年11月開催の「気候の挑戦と人口圧力」と題するシンポジウムにおける報告の一つからとられ，もう1篇は特別寄稿によるものである．

編者 BRASS（ロンドン大学衛生学・熱帯医学教室）は本書の序文で次のようにのべている：「従来の人口学者の関心は，生物学的，社会的，地理的集団における人口構造とそれらの変動過程とにあった．人口の諸特性とそれを決定する生物学的要因との間の関係ならびに人口の特徴とその変動がもたらす生物学的帰結について，いろいろな研究がなされるようになったのは，ごく近年のことである．そのような研究は課題と方法の点で色々である．たとえば，死亡率の規則性に関する数学的モデルから出土人骨による古代人の罹病状況まで，また，出生力のコンピューター・シミュレーションから急速な人口増加の生態学的帰結にいたる種々のものにおよんでいる．……生物学の研究と人口の研究とは，さまざまな形と程度で相互に関連しあっていて，整然とした形でこれを整理することは不可能である．本書の題目のような簡単な表現は，内容を大ざっぱに暗示したものにすぎず，本書は分野全体を概観しようとしたものではなく，現在進歩しつつある多くの方面から若干のものを選び出し，いわば，あじみ（味見）をしてみようとするものである」．この序文によって，本書の編集の意図はよく理解しうるものと思われる．

本書所収の論文には章番号がつけられていないが，最初から順次，題目と著者を紹介すれば次のごとくである．

「集団構造と移動パターン」A. J. BOYCE, C. F. KÜCHEMANN, G. A. HARRISON（オクスフォード大学解剖学教室人類学研究室）(pp. 1～9)；「人口再生産のモンテカルロ・シミュレーション」J. C. BARRETT（ロンドン大学衛生学・熱帯医学教室）(pp. 11～30)；「ひしめく人口と未利用地」JOHN I. CLARKE（ダーラム大学地理学教室）(pp. 31～55)；「死亡率，死因分析，予測および確率過程に関する理論の若干の側面」R. E. BEARD（ロンドン，パール生命保険会社）(pp. 57～68)；「死亡率をはかる尺度について」W. BRASS（ロンドン大学衛生学・熱帯医学教室）(pp. 69～110)；「古人口学」DON R. BROTHWELL（大英博物館自然史部門）(pp. 111～130)；「生態学的立場からみた人類人口の変動」J. G. SKELLAM（ロンドン，自然管理局）(pp. 131～146)；「胎内成長，その測定に関連する若干の問題についての考察」P. M. DUNN, N. R. BUTLER（ブリストル大学小児衛生学教室）(pp. 147～167).

紙面の都合で各論文ごとの紹介，論評を行なう余裕はないが，とにかく，生物学的人口学に関する図書がこれまでいちじるしく欠けていた点で，本書の刊行はこの方面を志す研究者にとって大いに歓迎すべきことであり，また社会経済的人口学の分野の人々にも，人口学のもう一つの側面に関する一層の興味を換起するにちがいない．さきにも紹介したように，本書はこの領域の若干の主要な課題についての論文が集められたもので，決して一冊に体系づけられた形のものではないが，尖端をゆく諸研究が紹介されていて新鮮である．

（小林　和正）